

実践研究事業

教員として必要な資質能力の育成に寄与する教育事業の在り方

～「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」の実践研究を通して～

中間報告書



踏み出せば

自分が変わる

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

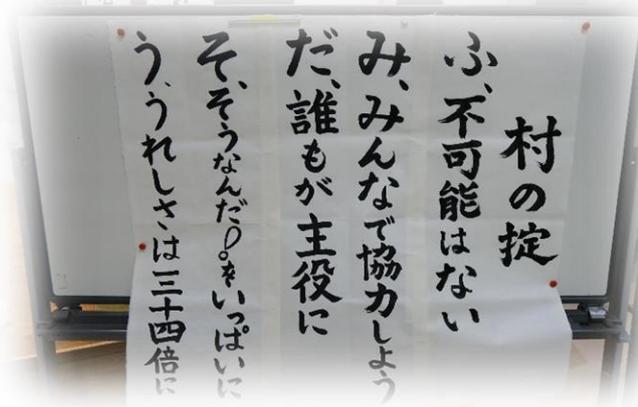


令和5年 3月

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大洲青少年交流の家

目次

- I 事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- II 令和3年度事業内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- III 令和4年度事業内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- IV 専門家の知見（愛媛大学教職総合センター准教授高橋平徳氏）・・・・・・ 13
- V 実践研究成果と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・ 16



1 研究のテーマ

教員として必要な資質能力の育成に寄与する教育事業の在り方
～「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」の実践研究を通して～

2 実践研究の背景

「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」（以下「リーダー村」）は、愛媛大学との共催により平成19年度に始まり、今年度で15回目の開催となる（令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の感染防止のために中止）。その間、社会の情勢は大きく変わったが、依然として体験活動が青少年教育指導者の養成や青少年健全育成に重要な役割を果たしていることは、当機構の調査研究より明らかである。リーダー村も「地域に根ざして活動するリーダーの養成」をねらいとし、教員や青少年教育指導者をめざす大学生を対象に、毎年少しずつ改良を重ねながら成果を上げてきた。

また、これからの教員に求められる資質や能力も社会の情勢により変化し、中央教育審議会において継続して審議されている。そこで、令和3年度より、これまでの成果を活かし、上記の研究テーマを設定し、愛媛大学の高橋准教授や日野教授と連携し、実践研究を開始した。令和4年度は、第4期中期目標期間の2年目にあたり、令和3年度と4年度の実践研究を踏まえて中間報告書を作成する。

3 実践研究事業概要

(1) 事業名

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村～「子どもむかし生活体験村」の企画・運営・直接指導を通して～

(2) 対象者

教員や青少年教育指導者をめざす大学生

(3) 事業のねらい

教員を志す大学生が、「子どもむかし生活体験村」（以下「体験村」）（小学4年生～6年生対象）の企画・運営・直接指導に携わることで、教員に必要な資質能力を身に付けることに寄与する。

(4) 連携する機関・研究者名

- ・国立大学法人 愛媛大学 准教授 高橋平徳 氏、教授 日野克博 氏、元教授 山崎哲司 氏
- ・松山東雲女子大学 ・愛媛県教育委員会社会教育課 ・大洲市

(5) 日程の概要

令和3年度		令和4年度	
日程	プログラム	日程	プログラム
10/13(水)	オンラインによるガイダンス	7/20(水)	オンラインによるガイダンス
11/20(土)	「生活体験村」の企画	8/16(火)	「生活体験村」の企画
11/21(日)	「生活体験村」の準備	8/17(水)	「生活体験村」の企画
11/27(土)	「生活体験村」（1日目）の運営	8/18(木)	「生活体験村」の準備
11/28(水)	「生活体験村」（2日目）の運営	8/19(金)	「生活体験村」（1日目）の運営
		8/20(土)	「生活体験村」（2日目）の運営
		8/21(日)	「生活体験村」（3日目）の運営

令和3年度と4年度はwith コロナの下、感染防止策を十分に講じながら、新しいリーダー村のプログラム開発に着手した。具体的には、日程を縮小しつつも、主体的・対話的で深い学びの実現に向けたプログラムを取り入れること、地域の豊かな教育資源（人材・自然・文化等）や施設機能、ICTの効果的な活用を図ること、体験活動を通して食育や安全教育の視点も取り入れること等である。

令和3年度 教育事業

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村(15年目)

1 事業概要

大学生は、11月20日～11月21日でリーダーシップや子供への接し方、集団作りの技法、伝承文化について学んだ。22日～26日で「子どもむかし生活体験村」に向けた企画や準備を行った。27日～28日には、小学生とともに過ごしながらか「子どもむかし生活体験村」を運営することで、リーダーとしての資質を身に付けるとともに、自分達が学んだことを子供達に伝えることができた。

2 事業の目的(ねらい)

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3 企画のポイント

新型コロナウイルス感染症の影響により、年度当初の計画から日程や活動場所を大幅に変更することとなった。感染対策として、宿泊場所を国立大洲青少年交流の家とし、活動場所も交流の家周辺の地域とした。また、事前の説明会や課題の提出、企画や準備等もオンラインで行った。

伊予の伝承文化を学び伝える視点として、歴史的文化財の保護や継承に着目した。大洲史談会副会長の澄田氏や八日市・護国町並保存センター主査の池田氏に講師を依頼し、大洲城の復元や上芳我邸の保存について学生が学ぶための機会を設定した。

- 4 主 催** 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学
- 5 後 援** 愛媛県教育委員会 大洲市教育委員会
- 6 期 日** 10月13日(水)(16:30～ZOOMによるガイダンス)
11月20日(土)～11月21日(日)(「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」)
11月27日(土)～11月28日(日)(「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」・「子どもむかし生活体験村」)
- 7 場 所** 国立大洲青少年交流の家、上芳我邸、大洲城
- 8 参加人数** 大学生10名
[子どもむかし生活体験村 小学校4～6年生20名(募集人数20名)]
- 9 講 師** 澄田 恭一 氏(大洲史談会副会長)
清水 大輔 氏(愛媛県教育委員会社会教育課社会教育主事)
池田 あかり氏(八日市・護国町並保存センター主査)
玉井 義幸 氏(国立大洲青少年交流の家研修指導員)
高橋 平徳 氏(愛媛大学准教授) 日野 克博 氏(愛媛大学附属中学校長(兼)教授)
山崎 哲司 氏(元愛媛大学教授) 国立大洲青少年交流の家 職員

10 日 程

<11月20日(土)>

8:55 送迎バス 大洲駅を出発
 9:15 受付
 9:30 開村式・アイスブレイク・役割分担決定
 10:30 自然体験活動(リーダーズプログラム②(*1)の实地踏査)
 12:00 昼食
 13:00 歴史体験活動 フィールドワーク①(大洲城と周辺地域)
 15:15 歴史体験活動 フィールドワーク②(上芳我邸と周辺地域)
 17:15 検温・夕食・入浴
 19:00 講義(*2)
 20:00 リーダーズプログラム①(*3)の計画・リフレクション・情報交換
 22:30 就寝(国立大洲青少年交流の家)
 (*1) 鶴ヶ森を舞台にした自然体験活動 (*2) 講義内容:「リーダーや教師に求められるもの」、「ボランティア活動の意義」
 (*3) キャンドルサービス (*4) 「子どもむかし生活体験村」を運営していく上での班、係、ルール等についての話し合い

<11月21日(日)>

6:30 起床・検温・清掃・朝食・退所点検
 9:00 普通救命講習Ⅰ
 12:00 昼食
 13:00 昔遊び体験
 14:00 子どもむかし生活体験村の準備(*4)
 15:30 リフレクション
 16:00 解散
 16:15 送迎バス 青少年交流の家を出発

<11月27日(土)>

8:55 送迎バス 大洲駅を出発
 9:15 受付
 9:30 小学生の受入準備
 10:30 小学生の受付
 11:00 開村式・アイスブレイク
 12:00 昼食
 13:00 歴史体験活動(大洲城と周辺地域)
 15:15 昔遊び体験活動・目標づくり
 17:00 検温・夕食・入浴
 19:00 キャンドルサービス(リーダーズプログラム①)
 20:30 小学生 就寝準備
 21:00 リフレクション・翌日の準備
 22:30 就寝(国立大洲青少年交流の家)

<11月28日(日)>

6:30 起床・検温・清掃・朝食・退所点検
 9:00 自然体験活動(リーダーズプログラム②)
 10:30 午後の発表の準備
 12:00 昼食
 13:00 小学生 発表練習
 13:30 2日間の思い出発表
 14:00 閉村式・見送り
 14:30 リフレクション
 16:00 送迎バス 青少年交流の家を出発

11 活動内容

【11月20日(土)】

「開村式・アイスブレイク・役割分担決定」

講師：国立大洲青少年交流の家職員

参加者の緊張をほぐし、「子どもむかし生活体験村」で行われる「仲間づくりゲーム」での指導方法を学んでもらうため、グループワークゲームを実施した。

「自然体験活動(リーダーズプログラム②の实地踏査)」

講師：国立大洲青少年交流の家職員

学生達は、自然体験活動の意義や活動プログラムを企画する際の留意点、安全管理等について学んだ。後半の企画では、学生ならではの柔軟な発想でアイデアを出し合い、リーダーズプログラム②の大まかな企画を立てることができた。

「歴史体験活動 フィールドワーク①・②」

講師：澄田 恭一 氏(大洲史談会副会長)

講師：池田 あかり 氏(八日市・護国町並保存センター主査)

澄田氏から大洲城の歴史や周辺地域の史跡、大洲城が復元されるに至った経緯等を、池田氏から上芳我邸が和蠟燭の原料加工で栄えた歴史や上芳我邸の保存運動等について学んだ。学生達は積極的にメモするとともに、「子どもむかし生活体験村」で自分たちが学んだことをどのように子供達に伝えるか構想を練っていた。



「リーダーや教師に求められるもの・ボランティア活動の意義」

講師：清水 大輔 氏(愛媛県教育委員会社会教育課社会教育主事)

リーダーとしての心構えや安全管理、事業に参加することで得られる学び等について清水氏から学ぶことができた。

「リーダーズプログラム①の計画」

講師：玉井 義幸 氏（国立大洲青少年交流の家研修指導員）

リーダーズプログラム①として、キャンドルサービスの構成や楽しむための手法について玉井氏より学ぶことができた。



【11月21日（日）】

「普通救命講習Ⅰ」

講師：国立大洲青少年交流の家職員

心肺蘇生法やAEDの使用法、三角巾を用いた止血法などを職員より教わった。緊急時に対応できるように、全員が真剣な表情で取り組んでいた。

「昔遊び体験」

講師：国立大洲青少年交流の家職員

職員より竹馬、羽子板、剣玉、お手玉、輪ゴム鉄砲等、交流の家にある遊具の紹介を受けて一通り体験した後、学生同士でアイデアを出し合いながらプログラムの計画を立てた。

「子どもむかし生活体験村の準備」

講師：高橋 平徳 氏（愛媛大学准教授）、

国立大洲青少年交流の家職員

部分参加となった学生とオンラインで打合せをしながら、子どもむかし生活体験村の準備を進めていった。2日間で行ったアイデアを1週間の準備期間で具現化するために役割分担や準備物を確認するなど、学生は意欲的に取り組んでいた。



【11月27日（土）】

「『子どもむかし生活体験村』開村式・アイスブレイク」

学生達は、開村式やアイスブレイクの進行を自ら行った。アイスブレイクでは、担当者はもちろん、他の学生達も協力して子供達の緊張を上手にほぐし、すぐに打ち解け合う姿が見られた。



「歴史体験活動」

11月20日に学んだことをもとに、プログラムを担当する学生が、子供達にクイズ形式で興味・関心を高めながら分かりやすく説明した。クイズの出題や説明時に子供達全員に声が行き届くよう拡声器を使ったり、自作の大型イラストを提示したりするなど、学生達は事前の準備を万全にした上で歴史体験活動に臨んでいた。

「昔遊び体験活動」

子供達は①巨大かるた、②お手玉、輪ゴム鉄砲、羽子板、剣玉を使ったミニ運動会、③ケイドロをして班ごとに得点を競いながら昔遊びを体験することができた。これらの企画も担当の学生が中心となって企画し、他の学生も協力して準備していた。



「目標づくり」

班ごとに目標を立て、代表の子供が発表した。大学生は、話合いの時には小学生から意見を上手に引き出し、発表の時は発表者を優しく見守ったり励ましたりしていた。子供達は学生達の支えもあり、自分達の班の目標をしっかりと発表できていた。

「キャンドルサービス（リーダーズプログラム①）」

子供達が入浴をしている時間に、プログラム担当の学生は、玉井氏からいただいたアドバイスをもとに入念な準備を行った。他の学生達も、本番が始まると、厳かな雰囲気を作ったり場を盛り上げたりして、皆が蠟燭の火を囲んで一つになることができた。

【11月28日（日）】

「自然体験活動（リーダーズプログラム②）」

野外炊飯場周辺の山をコースとして、子供達はウォークラリー形式で班ごとにチェックポイントを回り、大学生が考えた問題に楽しみながら挑戦した。出発前には危険な生物や植物についても学生が説明し、研修で学んだ安全管理の知識が活かされていた。



「思い出発表・閉村式・リフレクション」

大学生が司会を務め、子供達が班ごとに保護者に対して思い出を発表した。短い準備時間にもかかわらず、子供達は堂々と発表することができた。また、小学生から大学生へのサプライズで歌と感謝の手紙が大学生に贈られた。学生達は感動して涙を流していた。



1.2 参加者の声

事業後アンケート結果（大学生：10名 小学生：20名）

【大学生】 *満足：90% *やや満足：10% *やや不満：0% *不満：0%

- チームで協力・連携することの大切さを学ぶことができた。
- 仲間、講師、職員、子供達から多くのことを学んだ。学んだことを今後に生かしたい。

【小学生】 *満足70% *やや満足：30% *やや不満：0% *不満：0%

- 想像していたよりもずっと楽しかった。またこのイベントに参加したい。
- 友達がたくさんできてうれしかった。大洲の歴史をみんなに伝えたい。

1.3 成果と課題

【成果】

大学生が仲間と協力することの大切さに気付けたこと、今後彼らが教師を目指していく上で学んだことを生かしていこうとすることは、事業の成果の一つと考える。また、「子ども生活体験村」までに5日間の準備期間があったことで、学生達はしっかりと準備して本番に臨むことができた。その点においては、例年よりも日程の縮小や活動場所の制限はあったものの、事業の一つの在り方を示すことができたと思われる。

【課題】

大学生のリーダー性や子供達の社会性を育むというねらいにおいて、長期宿泊型の事業に効果があることは、既にこれまでの報告書に記されている。しかし、限られた予算の下、少ない職員数での運営に加え、新型コロナウイルス感染症の感染対策等も踏まえ、事業を継続させることを考えるにあたっては、今後、従来の長期宿泊型の実施だけではなく、今年度のように国立大洲青少年交流の家を拠点に日程を短くして活動し、成果を上げる工夫をするなど、事業の在り方を検討していく必要がある。

（担当：企画指導専門職 徳田 義実）

令和4年度 教育事業(指導者等養成研修事業)

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村(16年目)

1 事業概要

大学生は、前半の3日間でリーダーシップや子供への接し方や集団作りの技法、伝承文化について学んだ。後半の日程では、小学生が参加する「子どもむかし生活体験村」の企画・運営を担当した。そして、後半の3日間を小学生とともに過ごす中で、リーダーとしての資質を身に付けるとともに、活動を通して伝承文化を小学生に伝えることができた。



2 事業の目的(ねらい)

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3 企画のポイント

前年度までの課題として、活動場所や日程の検討、with コロナ時代に対応した宿泊事業の在り方等が挙げられていた。そこで、今年度は、①オンラインで講義を事前に受講することで日程を短縮しながらも「子どもむかし生活体験村」の準備時間を確保すること、②感染対策を十分に講じた上で交流の家を宿泊場所とし、交流の家やその周辺地域の素材(自然・文化・人材等)を用いて伊予の伝承文化を学ぶことを企画のポイントとした。②については、肱川の水運や大洲の郷土料理に着目し、学びを深めるための体験活動として、カヌーや芋炊き作りに挑戦するプログラムを企画した。

4 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学

5 後 援 愛媛県教育委員会 大洲市教育委員会

6 期 日 令和4年8月16日(火)～21日(日)
※大学生を対象とした参加者講習会を7月20日(水)に実施
※子どもむかし生活体験村は8月19日(金)～21日(日)に実施

7 場 所 国立大洲青少年交流の家

8 参加人数 大学生15名
〔子どもむかし生活体験村 小学校4～6年生19名(募集人数20名)〕

9 講 師

山田 広志 氏(大洲市立博物館 学芸員) 山崎 哲司 氏(元愛媛大学教授)
日野 克博 氏(愛媛大学教授) 高橋 平徳 氏(愛媛大学准教授)
玉井 義幸 氏(国立大洲青少年交流の家研修指導員)
重松 公爾 氏(大洲地区広域消防事務組合消防署員)
羽藤 大晟 氏(伊予市立岡田小学校 教諭) 国立大洲青少年交流の家 職員

10 日 程

7/20 (水)	16:20											17:50										
	オンラインによる ガイダンス																					
8/16 (火)	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	16:00					17:00	18:00			21:00	23:00						
		受付・検温	開村式・リ	アイスブレイク	昼食	(講義・演習) 安全管理 普通救命講習 I	うちわ作り	つどい 検温等	野外炊飯 (芋炊き)	入浴 リフレクション 情報交換会	就寝											
8/17 (水)	7:30	8:30	12:00			13:00	15:00			17:00		18:00	21:00	22:30								
	検温・朝食	カヌー、川遊び (荒天：昔遊び体験)			弁当	午前中の活動 の続き	歴史体験活動 (大洲城、大洲市立博物館)	つどい 検温等 夕食	講義 キャンドルサービス	入浴 リフレクション	就寝											
8/18 (木)	7:30	9:00	12:00			13:00	17:00			18:00	21:00	22:30										
	検温・朝食	昔遊び体験・生活体験村 準備			昼食	生活体験村の準備			つどい 検温等 夕食	生活体験村の 準備	入浴 リフレクション	就寝										
8/19 (金)	7:30	8:30	10:00	11:00	12:00	13:00	15:00		17:00	17:30	20:00		22:30									
	検温・朝食	受入れ 準備	開村式・生	アイスブレイク	昼食	班のきまり 係決め 決まり発表 ベッドメイキング	うちわ作り	つどい 検温等	野外炊飯 (芋炊き)	入浴 リフレクション	就寝											
8/20 (土)	7:30	8:30	12:00			13:00	15:00		17:00		18:00	20:00	22:30									
	検温・朝食	カヌー、川遊び (荒天：昔遊び)			昼食	カヌー、川遊び (荒天：昔遊び)	歴史体験活動 (大洲城)	つどい 検温等 夕食	キャンドル サービス 思い出発表 準備	入浴 リフレクション	就寝											
8/21 (日)	7:30	8:30	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00															
	検温・朝食	退所 点検	発表 準備	思 い 出 発 表	閉 村 式 ・ 生	閉 村 式 ・ リ	解 散															

11 活動内容

〈第1日〉8月16日(火)

「アイスブレイク」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

「子どもむかし生活体験村」で行われる「仲間づくりゲーム」での指導方法を学んでもらうため、グループワークゲームを行い、大学生参加者の緊張をほぐした。活動が進むにつれて、徐々に参加者の笑顔が広がっていった。



「普通救命講習Ⅰ」

講師：重松 公爾 氏（大洲地区広域消防事務組合消防署員）

大学生は、心肺蘇生法やAEDの使用方法、毛布を使っての運搬方法など、多くの事を学び、緊急時の対応について理解した。また、全員が真剣な表情で、実技にも一生懸命に取り組んだ。

「うちわ作り」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

「子どもむかし生活体験村」で、大学生が小学生にうちわ作りを指導するため、その技術を習得しようと全員が熱心に取り組んでいた。また、指導する際に落ち着いてできるような時間設定や声掛けなどについても学ぶことができた。

「野外炊飯（芋炊き）」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

大洲市の芋炊きの歴史に触れ、子供たちが野外炊飯をする際にどのようにして安全面に気を付けて実施をすれば良いのかを考えながら活動した。楽しみながらも、小学生がいることを想定しながら意見を出し合い、真剣に取り組んだ。



〈第2日〉8月17日（水）

「カヌー 平水」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

午前中のカヌー研修では、カヌーの運び方や平水でパドルの使い方、カヌーツーリングでの笛による指示の仕方、及びリバーサインについて確認した。初めは、個人でのカヌーの操作に苦労していた様子であったが、時間が経つにつれ、他の学生と会話をしながら笑顔でカヌーを操作することができていた。

「川遊び」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

河原では、子供たちが楽しく安全に活動できる遊びを考えた。当日は熱中症対策も必要という視点から、大学生は川の中の生物観察や座っての水切り、石集めなど、体力の消耗が少ない活動を準備していた活動を準備していた。

「カヌー（ツーリング）」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

午前中のカヌー研修で学んだことを生かしながらかヌーツーリングを実施した。カヌーの操作だけでなく、歴史的建造物の少彦名神社や臥龍山荘、大洲神社、大洲城などに加え、河原の様子や野鳥、魚などを見て子供たちに何を伝えるのかを意欲的に学んだ。



「歴史体験活動」

講師：山田 広志 氏（大洲市立博物館 学芸員）

大洲市立博物館の見学では、大洲城や周辺の歴史、火縄銃などについて学んだ。大洲城周辺の探索では、町並みやお城の特徴について見て回り、博物館で見た資料と照らし合わせながら詳しく説明を受けた。



「ボランティア活動の意義」

講師：羽藤 大晟 氏（伊予市立岡田小学校 教諭）

小学生との生活体験を控えて、小学生への接し方とグループのルール作りや目標作りの手法について、羽藤氏から講義していただいた。子供たちと関わる際のポイントについても具体的に学ぶことができた。

「キャンドルサービス」

講師：玉井 義幸 氏（国立大洲青少年交流の家 研修指導員）

キャンドルサービスの構成や楽しむための手法について玉井氏より学んだ。キャンドルサービスでは、厳かな雰囲気や楽しむ場面を区別するためにポイントを具体的に体験しながら学ぶことができた。



〈第3日〉8月18日（木）

「昔遊び・生活体験村の準備」

講師：高橋 平徳 氏（愛媛大学准教授）、国立大洲青少年交流の家 職員

各役割担当で話し合いながら準備を進めた。その際、子供の目線に立って考えたり、大学生役と子供役に分かれて役割演技したりするなど、意欲的に準備に取り組む姿が見られた。



〈第4日〉8月19日（金）

「『子どもむかし生活体験村』開村式・アイスブレイク」

大学生が、開村式やアイスブレイクの進行を行った。アイスブレイクでは、担当者以外の学生も積極的に子供たちと関わり、緊張をほぐし、子供たちの表情が豊かになっていくのを感じた。



「班のきまり・係決め・きまり発表」

各班での目標を立てた。大学生は小学生から思いや言葉を聞き、班全員の思いを画用紙にまとめた。大学生の支えがあり、小学生は発表の時にしっかりと班のきまりを発表することができた。発表前には、大学生が小学生に発表のポイントをアドバイスしたり、発表時に優しく見守ったりする姿が見られた。



「うちわ作り」

大学生がうちわの作り方について準備していた資料を使って小学生に指導した。班の仲間で協力してうちわ作りを進める過程で話も弾み、時間とともに打ち解けていく様子が見られた。特に、うちわに描くイラストを大学生と小学生が相談しながら決めている姿は、見ていて微笑ましかった。



「野外炊飯（芋炊き）」

野外炊飯場を利用して芋炊き作りを行った。大学生は事前に学んだことを生かしながら感染予防にも気を付けて、子供たちと楽しく調理をしていた。また、食材を切る係やかまど係などの役割分担をして協力して取り組んだ。美味しい芋炊きを作るため、小学生と大学生が積極的にコミュニケーションを取り、調理に励んでいた。



〈第5日〉8月20日（土）「カヌー（平水）」

カヌーの運び方や平水でのパドルの使い方、カヌーツーリングでの笛での指示の仕方、及びリバーサインについて確認した。大学生は、班員の小学生の行動を観察しながら的確にアドバイスし、小学生は楽しくカヌーを操作することができていた。



「川遊び」

当日は熱中症対策に留意して、座ってできる遊びや川の中の生物観察など、子供たちに体を休めることを意識した活動を選択している学生が多く見られた。大学生が進んで子供たちの体調管理や安全に気を付けて活動していることがうかがえた。



「カヌー（ツーリング）」

午前中に学んだカヌーの操作を生かしながらカヌーツーリングを実施した。カヌーの操作だけでなく、友達と会話をしたり、歴史的建造物や景観などを見て楽しくツーリングしたりすることができた。長距離を移動するため、大学生が小学生を励ましたりしている場面が多く見られた。



「歴史体験活動（大洲城）」

学芸員の山田氏から学んだことを小学生に分かりやすく説明したり、問題形式にしたりして大洲城までの道のりを楽しんだ。大洲城では、班活動をして一緒に場内を巡った。大学生と小学生は同じ目線で見学し、外の景色を楽しんだり、城内に大工が遊び心で製作したテントウムシやネズミを見付けたりする活動にも取り組んでいた。



「キャンドルサービス」

玉井氏からいただいたアドバイスを基に、プログラム担当者だけでなく、他の学生たちも協力して入念な準備を行った。本番が始まると、厳かな雰囲気を作ったり、場を盛り上げたりして楽しい一時を過ごすことができた。大学生と小学生たちがみんな楽しい時間を作り、蝋燭の火を囲んで一つになることができた。



〈第6日〉8月21日(日)

「思い出発表」

担当の大学生リーダーが司会を務め、思い出発表を行った。小学生が各班で思い出を発表し、他の班の小学生や大学生、保護者が発表を聞いた。小学生は、生き生きとした表情で、印象に残った活動内容や班全体の成果などを発表した。



「閉村式(子どもむかし生活体験村)」

代表の小学生が3日間の感想を発表し、副村長(次長)が挨拶した後、大学生が閉村式を締めくくろうとした時、小学生から大学生へのサプライズが行われた。前日の夜に大学生が振り返りを行っている間に練習した、歌と感謝の色紙が大学生に贈られた。会場にいた保護者の涙も誘い、3日間の共同生活が締めくくられた。



「閉村式(リーダー村)」

大学生がリーダー村での感想を発表し、愛媛大学職員、交流の家職員がそれぞれ感想を述べた。大学生の感想から、想像していた以上の感動体験をすることができ、そこから学ぶことがたくさんあったことが伺えた。閉村式後にも、大学生が一丸となって片付けを行い、5泊6日でより積極的に行動したり、意見を出し合ったりする姿が見られるようになったと感じた。



1.2 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【大学生】 *満足：100% *やや満足：0% *やや不満：0% *不満：0%

- 自分を成長させることができ、たくさんのことを学ぶことができたので、参加して良かったです。
- とても勉強になった5泊6日でした。貴重な経験をありがとうございました。

【小学生】 *満足95% *やや満足：5% *やや不満：0% *不満：0%

- みんなと仲良くなれた。(11歳・男子)
- 最初は緊張していたけれど、すぐに友達ができて、とても楽しかったです。(9歳・男子)
- 大学生がとても優しく、面白かった。(11歳・女子)

1.3 事業の成果

「子どもむかし生活体験村」の準備時間を十分に確保したことで、学生はそれまで学んだ知識や技法を互いに確認し合いながら「子どもむかし生活体験村」の準備にじっくりと取り組むことができた。また、一人ひとりが楽しみながらもそれぞれの課題に真剣に向き合い、充実した日々を送ることができた様子が、リフレクションや満足度100%のアンケート結果からもうかがえた。

1.4 事業の課題

昨年度に引き続き、今年度もコロナの影響でリーダー経験者の参加は1名のみとなった。初めて事業に参加する学生にとって、講師だけでなく先輩リーダーから学ぶことは多い。今年度の経験者が来年度も参加できるよう、大学側と日程を調整していく必要がある。また、本事業はモデル事業の一つである。教員に必要な資質能力の育成に効果的なプログラムや指導法の開発に向けて、愛媛大学の高橋准教授とも連携を密にし、事業の普及・啓発のための準備を進めていきたい。

(担当：企画指導専門職 二宮啓)

「伊予の伝承文化を伝えるリーダー村」における成果

(※本稿は、以下論文から抜粋して再編集したものである。高橋平徳、日野克博、徳田義実、二宮啓、高木啓吾 (2023) with コロナ時代における学生宿泊型教育体験活動の試み—2021年度、2022年度「リーダー村」での活動より—。大学教育実践ジャーナル, 22.)

1. 研究の対象と方法

リーダー村の成果を検討するため、2021年度及び2022年度参加学生に対する質問紙を用いた記名式の事前事後アンケート調査を実施した。対象者は2021年度10名、2021年度15名である(回収率は両年とも100%)。事前調査は開村式、事後調査は閉村式の際に記入を依頼した。質問項目は、「これからの教員に求められる資質能力」として、2021年度段階では、リーダー村の目的、愛媛大学教職課程ディプロマ・ポリシーや、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(中央教育審議会, 2015)等での言及を踏まえた7項目である。2022年度では、中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」(中央教育審議会, 2021)での言及を踏まえ研究者間で検討して項目を追加し合計12項目とした。以上の項目について「とてもそう思う5、そう思う4、どちらともいえない3、そう思わない2、全くそう思わない1」の5段階で回答を求めた(表1, 表2)。

また、参加学生に対して、事後アンケートと同時に、「リーダー村全体を通して成長を実感すること」についての自由記述を依頼した。さらに、2022年9月29日、10月3日に、2022年度参加の教育学部1年生4名に対して対面の30分から40分程度のインタビューを行った。また、2022年9月29日に、2021年度参加の教育学部卒業生(現職教員)に対してZoomを活用した30分程度のインタビューを行った。インタビューの内容は、「リーダー村から少し時間が経って成長を実感していること」や、「そう思える具体的なエピソード」等であり、協力者に許可を得て録音し、逐語録を作成した。

1-2. 分析方法

事前事後アンケートは、各項目についてのリーダー村開始段階(事前)と終了段階(事後)の平均点及び標準偏差を算出した。またリーダー村事前事後の得点の有意水準を検討するため対応のあるt検定を行った。そして、各項目

の事前事後の効果量(r)を算出した。

自由記述及びインタビュー調査での逐語録といった質的データは、回答の意味内容を読み取り、事前事後アンケートの各質問項目に沿って分類し代表的なものを抜粋した。以上の量的、質的データの検討によってリーダー村の成果を明らかにしていく。なお、本研究は、愛媛大学教育・学生支援機構研究倫理委員会の承認を得て実施された(受付番号22-001)。2021年度事前事後アンケートと自由記述についても倫理的配慮と個人情報保護について口頭と文書で説明し、研究協力への同意を得て実施した。

2. 結果と考察

2-1. 事前事後質問紙調査の結果

2021年度についての各項目の平均値と標準偏差は表1の通りである。項目2。「多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる」を除き、事前と事後で有意差があり($p<0.05$)、平均値が増加している。効果量(r)の値は、項目2については $r=0.36$ の効果量中で、その他の項目は0.67以上の効果量大を示していた。

2022年度の各項目の平均値と標準偏差は表2の通りで、全項目において、事前事後の得点に $p<0.5$ の有意差が認められ、平均値が増加していた。また、効果量(r)の値についても、全項目0.65以上で効果量大を示していた。

2-2. リーダー村の成果の考察

以下、事前事後調査結果をもとに、自由記述とインタビューでの言及も押さえながら考察していく。

2021年度は項目2を除き、事前と事後で有意差があり、平均値が増加し、効果量も大であったことは、1泊2日を2週に分けて実施した緊急的なプログラムでありながら十分学生の資質能力の育成に貢献できていると捉えることができる。

ただ、効果量中であった項目2については、子どもとかわる時間が2泊3日となった2022年度では、有意差があり平均値が大きく増加、効果量も大であった($r=0.81$)。このことから、子どもと適切なコミュニケーションがとる力が身についたと思えるには、2泊3日程度は子どもとかわる時間が必要であることが伺える。

項目「3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる」

表 1 2021 年度参加学生への事前事後質問紙調査の結果

項目	カテゴリ	Mean±SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べるができる	事前	3.2 ± 0.6	p=.024	r = 0.67
	事後	3.8 ± 0.9		
2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる	事前	3.9 ± 0.5	p=.279	r = 0.36
	事後	4.2 ± 0.7		
3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる	事前	3.5 ± 0.9	p=.003	r = 0.80
	事後	4.3 ± 0.6		
4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる	事前	3.6 ± 0.8	p=.001	r = 0.86
	事後	4.5 ± 0.5		
5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる	事前	2.9 ± 0.8	p=.007	r = 0.76
	事後	4.0 ± 0.8		
6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる	事前	3.8 ± 0.4	p=.000	r = 0.91
	事後	4.8 ± 0.4		
7. 不明な点や困ったことがあれば、企画者（地域の方々や、職員、教員）に適切に質問や相談ができる	事前	4.1 ± 0.5	p=.010	r = 0.74
	事後	4.8 ± 0.4		

表 2 2022 年度参加学生への事前事後質問紙調査の結果

項目	カテゴリ	Mean±SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べるができる	事前	3.3 ± 0.6	p=.000	r = 0.88
	事後	4.3 ± 0.6		
2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる	事前	3.7 ± 0.7	p=.000	r = 0.81
	事後	4.7 ± 0.4		
3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる	事前	3.2 ± 0.7	p=.000	r = 0.88
	事後	4.4 ± 0.5		
4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる	事前	3.6 ± 0.6	p=.000	r = 0.88
	事後	4.8 ± 0.5		
5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる	事前	3.2 ± 0.7	p=.000	r = 0.89
	事後	4.7 ± 0.4		
6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる	事前	4.1 ± 0.5	p=.000	r = 0.86
	事後	4.9 ± 0.3		
7. 不明な点や困ったことがあれば、企画者（地域の方々や、職員、教員）に適切に質問や相談ができる	事前	4.3 ± 0.4	p=.006	r = 0.65
	事後	4.8 ± 0.4		
8. 子どもの成長を支援するための体験活動を安全かつ効果的に指導することができる	事前	3.3 ± 0.8	p=.000	r = 0.87
	事後	4.7 ± 0.5		
9. 子どもの興味・関心・意欲を意識して、子ども一人一人の活動を支援することができる	事前	3.9 ± 0.5	p=.000	r = 0.89
	事後	4.9 ± 0.3		
10. 状況を判断しながら、臨機応変に対応することができる	事前	3.5 ± 0.6	p=.000	r = 0.89
	事後	4.7 ± 0.4		
11. 情報モラルを守り、必要に応じてICTを活用することができる	事前	3.4 ± 0.8	p=.003	r = 0.69
	事後	4.1 ± 0.7		
12. 施設の職員や地域の人々から学んだことを活かしてプログラムを企画することができる	事前	3.4 ± 0.6	p=.000	r = 0.86
	事後	4.7 ± 0.4		

については、以下のように、現在教員となっている参加学生から、学校現場でリーダー村での学びが生きていると感じているという言及があった。

- ・ 「リーダー村では学生同士で一つになっていきなり仲良くなって企画を考えていきますけど、大学の時にそういうことを経験しておく、集団宿泊学習とか地域と連携しながら行う行事の時に自分の中に経験したものがあるので、それを持って会議とかに参加できるので貢献しやすいと思っています。それに学校現場でも色んな年代の人がいる中で、うまくコミュニケーションを取って、自分が初任者なのでわからない事も沢山あって、そういう時にどうしたらいいかを聞きに行ったり、こういう案もと提案できたり、学校全体でチームとして動く時に、リーダー村でいろんな人と連携できたことがすごく役立ってるって思っています。」

2022年度については、全項目で効果量大であり、子どもとかかわる日数が2泊3日となったこと、参加者の多くが1年生であったことなども影響があるかもしれないが、量的データを確認するだけでも非常に学生の資質能力の育成に貢献できていることがわかる。

最も事後の値の平均が大きくなっているのは、項目「6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる」と、項目「9. 子どもの興味・関心・意欲を意識して、子ども一人一人の活動を支援することができる」の4.9であった。これは効果量についてもそれぞれ $r=0.86$ と 0.89 という高い値であった。自由記述やインタビューでもこの2項目については以下のように言及されている。

- ・ チームで協力することの大切さを心から実感することができました。今まで言葉では何度も口にしていたけれどその意味の本当の大切さを理解することができました。ほかの大学生メンバーと助け合いながら活動することで、子供たちに良い思い出を作ってあげることができたと思います。
- ・ 「お城あんまり興味ない、って子もいたんですが、お城に興味はなくてもクイズは好きということがあって、クイズ形式の活動に工夫して、楽しんでもらえてたからよかったと思います。」

教員を目指す学生が、メンバーとの協調といった協働的な学びを通して獲得できるであろう力や、子ども一人一人の興味・関心・意欲に寄り沿う個別最適な学びを支援する

力といった「令和の日本型学校教育」において求められる資質能力を身につけられたと強く感じられていることは、リーダー村での非常に大きな成果である。

2022年度で事後に値が最も大きく変化した項目は、「5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる」であった（事前3.2，事後4.7）。また「12. 施設の職員や地域の人々から学んだことを活かしてプログラムを企画することができる」も事前の値は小さくなっている（事前3.4，事後4.7）。これらの項目の事前の値が小さいのは、リーダー村で初めて学生自身でプログラムを計画する機会を得られたことに関係するかもしれない。自由記述やインタビューからは、時間や場所、人数のことなど頭に入れながら、何をすればいいのかを考えたり、学んだことを子どもたちに提供する際どう工夫すればよいか学べたとの言及が多くあった。こうした力を高めるためにも、学生自身でプログラムを計画する機会を提供していきたい。

その他、12の項目とは別に、リーダー村での活動を通して、子どもと関わる意欲、挑戦への意欲、教師のやりがいへの気づき、将来の目標の獲得、今後の大学生活の指針の獲得、体験学習の重要性の認識、宿泊型教育体験活動の意義など、学生は数多くの成果を獲得してくれていることが伺える言及が多くあった。一例を以下に挙げる。

- ・ 今回濃密な6日間の中で得たものは多すぎるが、一番はやっぱり目の前の子どもとまっすぐ向き合い褒めてあげると目に見えて子どもは成長して行くんだと実感した。こんな私たちをリーダーとして頼ってくれて、自分自身の自信にも直結したし、子どもの潜在能力からたくさんのことを学ばせてもらった。本当に本当に参加して良かった。今までは躊躇しがちな部分もあったが今回とにかく何でも挑戦してみることを意識すると新しい扉を開けた気がした。これからも積極的に何事にも取り組んでいきたい。

3. おわりに

以上のように事前事後アンケートという量的データ、自由記述とインタビューという質的データの分析から、学生の「これからの教員に求められる資質能力」の育成に十分貢献できていることが明らかとなった。今後も「伊予の伝承文化を伝えるリーダー村」を改善しながら継続し、より学生の資質能力の育成に貢献できる活動にしていきたい。

1. 実施の際に工夫した点

新型コロナウイルス感染症対策のため、日程や場所などを変更しながらの運営することとなったため、オンラインでプログラムを実施したり、伊予の伝承文化を学ぶ視点については大洲の歴史的文化財の保護や継承を行っている団体と連携したりすることで対応した。令和3年度は、長期のプログラムは難しいと判断し、1泊2日で2週連続で行う方法をとった。

令和4年度についても、オンラインを活用し、大学生には法人ボランティア登録に必要な講義をGoogleドライブを活用した遠隔非同期型で事前に受講してもらった。それにより、ICT活用能力の向上を図るとともに、「子どもむかし生活体験村」の企画・運営の時間を十分に確保できるようにした。また、伊予の伝承文化の視点として、肱川の水運と郷土料理に着目し、大洲青少年交流の家で提供しているカヌーや、野外炊飯で芋炊き作りに挑戦するプログラムを企画したことで、学生たちが安全教育や食育について考える場にもなった。

2. 実践研究成果

愛媛大学の高橋准教授の協力の下、教員として必要な資質能力として、令和3年度は7項目で調査を行っていたが、国立青少年教育振興機構青少年教育研究センターのこれまでの調査研究や「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（令和3年1月26日中央教育審議会答申）」などを参考に、5項目を追加し、12項目を設定した。高橋准教授の報告にある通り、すべての項目において事業実施後に効果量大との結果が得られ、本事業が教員として必要な資質能力の向上に大きく貢献していることが分かった。

また、事業の振り返りやアンケートにおいても、「仲間と協力することの大切さに気づくことができた。」「仲間、職員、講師、子供たちから多くのことを学んだ。それらの学びを今後教師を目指す上で生かしていきたい。」との声を多くの大学生から聞くことができた。職場の同僚や保護者、地域住民との連携や、子供たちと共に成長していこうとする姿勢は、教員に求められる資質や能力の1つであり、多くの学生から上述の感想が述べられたことは、事業の成果の1つである。

3. 今後の課題

令和3～4年度については、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、昨年度までの経験者（アドバンスリーダー）が不在であった。そのため、OBにアドバンスリーダーを依頼したが、来年度は、今年度の参加者がアドバンスリーダーとして新規参加者を育てていく必要がある。

また、実践研究の目的としては、これからの教員に求められる資質能力を育成するための宿泊型体験活動事業の在り方（プログラムや指導法等）を明らかにすることであるので、今後は、12項目の調査を継続するとともに、新規リーダーとアドバンスリーダーの効果の比較や自由記述の分析などにより、地域指導を活かした資質能力の向上に有効なプログラムや指導法等を検証していく必要がある。

教員を目指す学生が青少年教育施設でどのようなボランティア活動をすることで、どのような資質能力を身に付けることができるかについて明らかにすることで、今後の青少年教育施設におけるボランティア活動の推進及び学校教育における体験活動の推進に寄与していきたい。



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大洲青少年交流の家

〒795-0001 愛媛県大洲市北只 1086 番地

TEL (0893) 24-5175 FAX (0893) 24-2909

URL: <https://ozu.niye.go.jp/>

e-mail: ozuzippy@niye.go.jp

体験の風を
おこそう

